第1章　昭和58年度京都大学構内遺跡調査の概要

上田正昭　　川上　貢　　浜崎一志

1　調査の大要

京都大学埋蔵文化財研究センターは，吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には，当該部局の報告にもとづき，予定地の埋蔵文化財の調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果より，試掘，発掘，立合にわけて実施している。

昭和58年度は，以下のように，試掘調査1件，発掘調査3件，立合調査12件，資料整理1件を実施した。

試掘調査	文学部博物館改築予定地(本部構内ＡＸ23区)	(第1章，図版1-133)
発掘調査	農学部熱帯農学科校舎新営予定地(北部構内ＢＥ33区)	(第3章，図版1-125)
	放射線生物研究センター研究棟新営予定地(医学部構内ＡＮ20区)	(第4章，図版1-134)
	理学部プラズマ実験装置室新営予定地(北部構内ＢＦ31区)	(発掘中，図版1-135)
立合調査	農学部農業工学科機械収納庫新営予定地(北部構内ＢＪ30区)	(図版1-136)
	化学研究所実験研究棟新営に伴う支障給水管配管替工事(京都府宇治市)	(表2)
	ヘリオトロン核融合研究センター・ヘリオトロン加熱実験棟新営(京都府宇治市)	(表2)
	楽友会館電気設備改修工事(ＡＬ22区)	(図版1-137)
	農学部資料館新営予定地(ＢＨ34区)	(図版1-138)
	化学研究所実験研究棟新営予定地(京都府宇治市)	(表2)
	医学部図書館書庫建設予定地(ＡＭ19区)	(第1章，図版1-139)
	食糧科学研究所新食品素材製造実験室(京都府宇治市)	(表2)
	理学部附属瀬戸臨海実験所寄宿舎等取りこわし工事(和歌山県白浜町)	(表2)
	文学部本館電気設備改修工事(本部構内ＡＸ25区)	(図版1-140)
	宇治構内基幹整備(漏電設備)工事(京都府宇治市)	(表2)
	農学部附属牧場高圧受変電設備設置工事(京都府船井郡丹波町)	(表2)
資料整理	工学部機械系学科校舎新営予定地(本部構内ＡＴ29区)	(第2章，図版1-124)

なお，文学部博物館改築予定地の試掘調査は文学部考古学研究室に依頼し，岡内三眞，宇野隆夫両助手が担当した。調査は旧博物館建物の中庭に9ヶ所，建物の西側に1ヶ所の試掘坑および試掘溝を設置しておこなった。その結果，近代の整地層の下で南西にむかって緩やかに下がる黄色砂層を検出した。この黄色砂層は北部構内から本部・教養部構内にかけて広く分布し，弥生前期末～中期初頭に堆積したと考えられており，旧地形復原の貴重な資料を得ることができた。遺物は近代の陶磁器とガラス片が出土しただけで，遺跡の存在する可能性はないと判断した。

2　調査の成果

前節に記載した調査のうち，昭和58年度に整理を終えた15件について，その成果を時代別に整理して略述する。なお，医学部図書館書庫建設予定地の立合調査については本章第3節で，また，個々の発掘調査については第2章以下で詳述する。

縄文時代　北部構内ＢＥ33区では白川の旧流路を検出し，ＢＧ31区（図版１-56）で検出した旧微高地の北西斜面や，ＢＥ29区（図版１-54）の旧流路とともに，ＢＦ33区（図版１-123）の旧微高地上の北白川追分町縄文遺跡をとりまく古環境を明らかにする資料を得た（第３章）。また，ＢＥ33区の調査では，遺物の原位置の記録に光波距離計とハンドヘルドコンピュータを導入し，遺物の分布状況の分析にマイクロコンピュータを用いることにより，調査の合理化と解析の迅速化に成功した〔浜崎84ｂ〕。

弥生時代　医学部構内ＡＮ20区では，弥生前期の溝を検出した（第４章）。教養部構内ＡＰ22区（図版Ｉ-111）で検出した同時期の水路の延長部分にあたると考えられる。

古墳時代と奈良時代　医学部構内ＡＮ20区で，古墳時代の須恵器杯身や，奈良時代の須恵器の杯身・杯蓋が少量出土しただけで，新たな知見は得られなかった。

平安時代　北部構内ＢＥ33区では平安時代末期の水田遺構を検出した（第３章）。水田は近世末まで連綿と営まれており，この地一帯の水田の変遷をたどることができた。

鎌倉時代と室町時代　本部構内ＡＴ29区で13世紀前葉の溝や土坑群と，13世紀中葉の土坑群と建物跡を検出した（第２章）。13世紀前葉の土坑からは一括投棄された瓦器羽釜・鍋が出土し，瓦器の煮炊用具の編年を検討する上で貴重な資料となった〔浜崎84a　p.38〕。

医学部構内ＡＮ20区では，13世紀中葉の井戸２基，14世紀中葉の井戸２基，15世紀中葉の井戸１基，および14世紀前葉～中葉ごろの土取り穴を検出した（第４章）。13世紀前葉の井戸は２基とも方形掘形方形木組の井戸であり，14世紀中葉以降の井戸は３基とも円形掘形円形石組の井戸で，井戸の形態変化を知る上で貴重な資料である。土取り穴はＡＰ19区（図版１-74）やＡＭ19区（図版１-139）でも検出しているが，ＡＯ18区（図版１-41）や教養部構内ＡＰ22区（図版１-111）にはない。14世紀前葉～中葉ごろの医学部構内東半部は，土の採取を妨げるもののない空白の地であったことを示し，藤原北家勧修寺流吉田氏の退転を示唆する資料である。

北部構内ＢＥ33区では，多数の野壺を検出した。これらの野壺には16世紀まで遡るものがあり，人糞を肥料として使用し始める時期を知る上で貴重な資料である。

江戸時代　北部構内ＢＥ33区で水田遺構と柵列を検出した（第３章）。

3　医学部構内ＡＭ19区の立合調査

本調査は，本学歴史的建築物である旧解剖学教室本館(明治34年竣工)を補強し，医学部図書館書庫として，保存・活用するための工事にともない実施した。建物の補強は，煉瓦造２階建ての旧本館の内側に，鉄筋コンクリート造の構造体を設置する方法が取られた。この構造体の基礎設置のため，旧本館煉瓦造基礎の下端まで全面にわたり掘り下げたところ，中世の遺物包含層を確認できた。そこで構造体の基礎耐力をそこなわないように，試掘坑を２ヶ所設けて(ＴＰ１，ＴＰ２)，下層の遺跡の確認をおこなった(図１)。また，図書館に通じる渡り廊下の基礎部分の調査もあわせておこなった(ＴＰ３，ＴＰ４)。

表土下の層序はほぼ水平で，基本的には表土(第１層)，青灰色土(第２層)，灰褐色土(第３層)，赤褐色土(第４層)，黄灰色シルト(第６層)が順に堆積している(図２)。青灰色土と灰褐色土は近世の遺物を，赤褐色土は14世紀ごろの遺物を含む。シルト混赤褐色土(第５層)は，不定形土坑の埋土であり，14世紀中葉の遺物を含む。黄灰色シルトからは遺物が出土しなかった。

検出した遺構は不定形土坑だけであった。不定形土坑は調査区のほぼ全域で検出した。検出面からの深さは調査区の西側では20cmと浅く，東側では80cmと深い。不定形土坑の形状，埋積の状況，埋積の時期，および黄灰色シルトを掘り込むなどの特徴が，本調査区の北約80ｍのＡＮ20区(第４章)の不定形土坑とよく似ており，一連のものと考えられる。

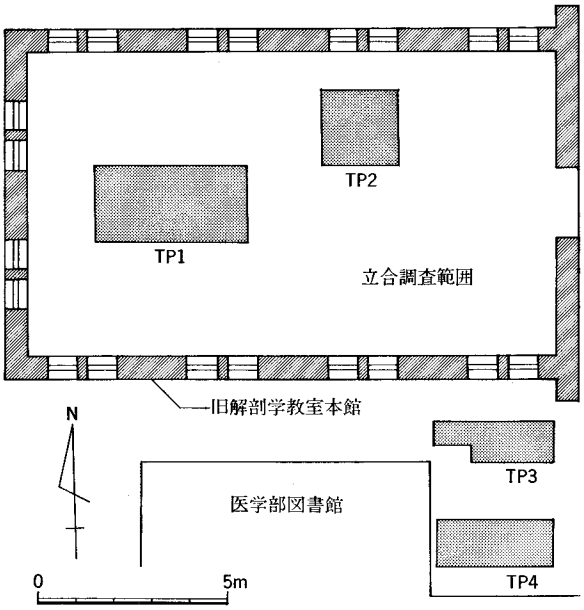

図１　立合調査の位置　縮尺1/200

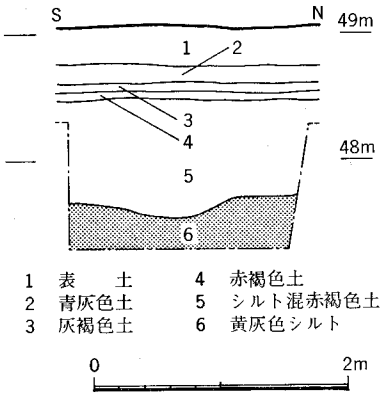

図２　ＴＰ１西壁の層位 縮尺1/60

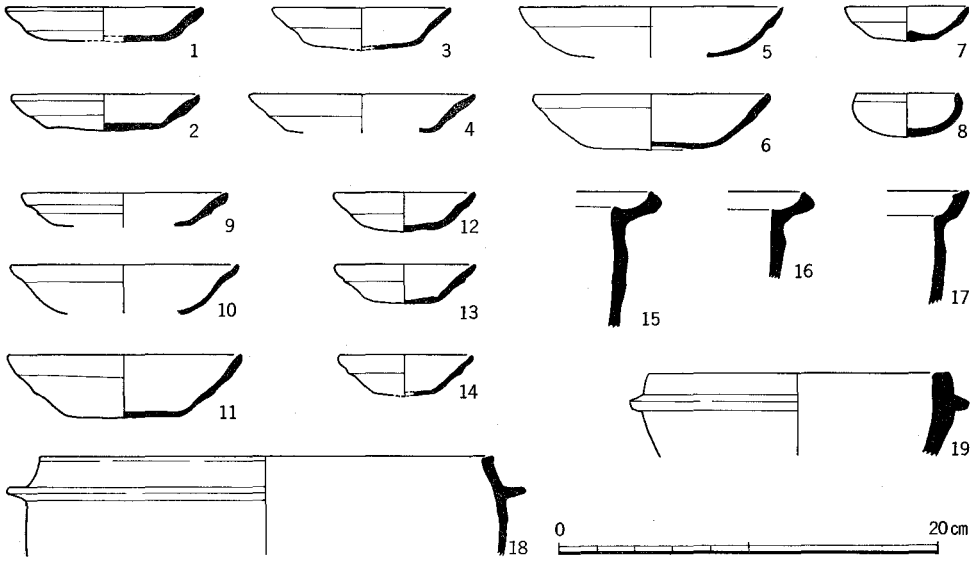

図3　赤褐色土出土遺物(1～8土師器)，不定形土坑出土遺物(9～14土師器，15～18瓦器，19石鍋)

出土した遺物は整理箱3箱分で，ほとんどが赤褐色土，および不定形土坑の埋土のシルト混赤褐色土から出土した遺物である。以下にその概略を記す(図3)。なお，土師器の口縁部形態は，宇野隆夫の分類によった〔宇野81 pp.64-5〕。

1～8は赤褐色土出土の遺物である。1～4は土師器皿で，全体に扁平である。口縁部形態は1段撫で面取り手法D_5類のもの(1・2)と1段撫で素縁E_1類のもの(3・4)がある。5～8は土師器椀で口縁部形態は1段撫で素縁E_1類のもの(5・6)と，1段撫で外反E_2類のもの(7)がある。8は口縁部が内傾する椀。いずれも14世紀のものである。

9～19は不定形土坑の埋土であるシルト混赤褐色土から出土した。9～14は土師器の椀・皿である。9は1段撫で面取りD_5類の土師器皿。10・11は1段撫でE_2類の大型の椀。12～14はE_2類の小型の椀。15～17は瓦器鍋で口縁部の蓋受けの部分の屈曲はかなりあまい。18は瓦器羽釜。口縁部はやや内傾し，体部もゆるやかな球形をなす。19は石鍋。土師器や瓦器はいずれも14世紀中葉ごろのもので，AN20区の不定形土坑の遺物とあまり時期差がなく，医学部構内東半部で検出される不定形土坑は一連のものと思われる。この時期の医学部構内東半部は土の採取を妨げるもののない空白の地であったと考えられる。